

竹内 瑞穂

ある時期の雑誌史料を、調査のために手当たり次第にめくっていると、ふとした瞬間、全く繋がりもないような雑誌同士のあいだにも、時代の感性とでもいうべきものが通底していることに気付かされることがある。ここ1年ほどのあいだに相次いで復刻がなされた、雑誌『犯罪科学』と『精神分析』を並べてみたときに垣間見えるのは、まさにそのような連続性である。

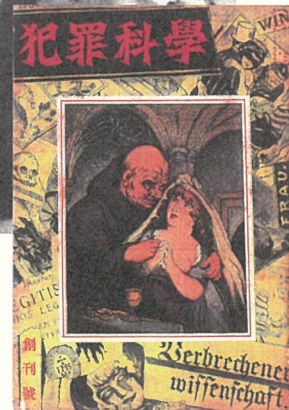
『犯罪科学』は、1930年6月から1932年12月のおよそ2年半に、増刊等を含め全38冊（うち3巻15号は発禁）が武俠社から出版された。その創刊号の巻頭言が示すように、この雑誌は人間社会の「暗黒面の実相を掴むこと」を目標に掲げ、犯罪学にとどまらず、民俗学・歴史学・社会学などにまたがる多くの論文が掲載されている。その執筆者たちのほとんどは、『中央公論』や『改造』などに代表される中央論壇で、華々しく活躍しているような人々ではない。だが、部落問題や貧困問題に取り組んだ草間八十雄、沖繩学を作り上げていった伊波普猷や金城朝永、考現学の提唱者の今和次郎、さらには日本における本格的な男色・同性愛研究の嚆矢である岩田準一などの、当時の正統アカデミズムからはこぼれ落ちてしまっていた多様な才能による論考が、しばしば掲載されていたことの意義は、決して小さくないだろう。

しかし、そうした学究的側面のみでこの雑誌を評価するのは、あまり適当ではない。実際には誌面の過半は、同時期のエロ・グロ・ナンセンスと呼ばれる潮流を色濃く反映した記事や写真・挿絵によって占められていたのである。おそらく、先に挙げた執筆者たちもまた、その論文がいかなるものであれ、この文脈のなかで読まれるために掲載され消費されていたのだらう。『犯罪科学』は、当時から既に「エロ・グロ出版の地下本、軟派雑誌

のごとき印象を与えて」おり、「学術性はいわば建前であって、本音では読者の「耽奇的趣味を満喫」させるために編まれていた」（馬場、2008）雑誌だったことは否めない。



図1、
『犯罪科学』創刊号
表紙と挿絵(p.120)



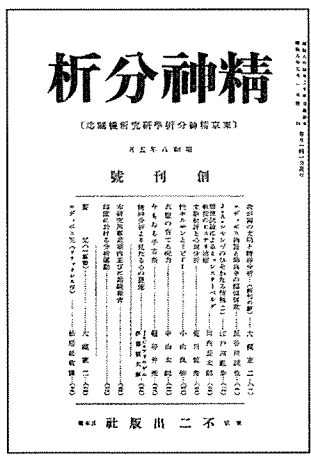
こうした『犯罪科学』に対して、『精神分析』はあまりに対照的な雑誌であるようにもみえる。

日本において精神分析学という学問が社会的に広く認知されるようになったのは、昭和初期のいわゆるフロイトブームがきっかけであった。1929年には、春陽堂の『フロイド精神分析学全集』と、アルス社の『フロイド精神分析大系』という二つの全集がほぼ同時に刊行を

開始しているが、そのうちの春陽堂版の翻訳を担当したのが、のちに『精神分析』を創刊する大槻憲二だったのである。文学者・文芸評論家であった大槻は、フロイト全集の仕事の終えた1933年の5月に、東京精神分析学研究所機関誌として不二出版社から『精神分析』を刊行し、以後は精神分析学者としての活動へとシフトしてゆく。雑誌は、戦時下の統制を受けて廃刊に至る1941年3月までのおよそ8年のあいだに、72冊が刊行され、この時期の日本における精神分析学の研究と紹介の一端を担ってゆくこととなる。(なお、『精神分析』は戦後に復刊)

この雑誌の雰囲気伝えるために、雑誌の構成が整いはじめた第1巻6号(1933.10)を例に、その主な内容を紹介しておこう。

図2、
『精神分析』創刊号表紙



巻頭

本研究所関係者名簿

研究

「犯罪者の心理」長谷川誠也／「マルクスとフロイドとを比較して所謂転向心理に論及す」大槻憲二／「理想我と犯罪心と宗教心」矢部八重吉／「J・A・シモンズのひそかなる情熱(四)」江戸川乱歩

時評

「時言数題」大槻憲二

資料

「フランスに於ける精神分析学の研究」E.Régis A.Hesnard、松田俊武訳／「心理学と政治」W.H.R.Rivers、岩倉具栄訳／「ある悖徳者の分析観察」則近保良／「捨て鉢」の心理」長崎文治／「社会心理の分析的研究文献」高水力太郎、伊東豊夫／「犯罪心理の分析的研究文献」高水力太郎

講座

「性的象徴に就いて」田内長太郎／「精神分析語彙(四)」

探訪(一)

「諸岡存博士の診療室」記者

ここには、精神分析学や心理学に関わる専門的な研究や翻訳が並べられており、この雑誌が全体として学術誌の体裁を保持していることがわかるだろう。だからこそ、どうしても長谷川誠也(天溪)や江戸川乱歩という文学者の名前が目についてしまうわけだが、彼らがここで書いているのはあくまで精神分析学や心理学を援用した評論文であって、他の論文と大差はない。

してみると、やはり『犯罪科学』と『精神分析』は、全く別領域の雑誌として考えるべきなのであろうか。だが、ここで一本の補助線を書き加えてみよう。すると、この両誌が根の部分で深く繋がっていることが次第にみえてくる。その補助線の役割を担うのが、大正期の「変態」ブームを裏で支え続けた雑誌『変態心理』である。

『変態心理』は、中村古峡により、日本精神医学会の機関月刊誌として1917年10月に創刊された。その後、1926年までのおよそ10年間にわたって、全103冊が発行されている。「変態」という題名から、のちに流行するエロ・グロ・ナンセンス出版物を想像してしまいがちだが、この雑誌は現在でいうところの精神病理学や臨床心理学を主題とした、アカデミズム志向の強い商業誌であった。

臨床心理学的なものが、正統なアカデミズムのなかではなく、民間学の領域に近いところで発展せざるを得なかったのは、abnormal psychology=変態心理学の日本への導入期に起こった、千里眼事件(1910-1911)の影響であろう。当時、東京帝大で変態心理学を講義していた福来友吉は、この千里眼や念写といった超能力の真偽をめぐる騒動に、肯定的立場から参与したがゆえに、その後否定論が優勢になるに伴い失脚してしまう(サトウ,2008)。これを契機に、変態心理学はアカデミズムの中核から脱落し、中途半端な立ち位置を余儀なくされてゆく。だが、その中途半端さは別の面から見れば、アカデミズムの狭隘な専門性にとらわれない知的空間をも生み出していた。この雑誌には、心理学にとどまらず、歴史・文学・社会学・民俗学等々の学知が雑多に掲載されたことで、学問的な豊穡がもたらされていたのである。

さらに、主幹である古峡をはじめとした変態心理学の研究家たちは、その学問的意義と権威の確立をめざし、既存の知への対抗のために〈無意識〉概念の積極的な導入を試みる。結果、誌上で重視されることになったのが、

同時期に最も尖端的なく(無意識)の科学として世界的に知られつつあった、フロイトの精神分析学であったのだ。

『精神分析』は、ここでみられるようなオルタナティブな知としての精神分析学のイメージを引き継ぐものである。大槻は創刊の辞で、多くの「医家」が、精神分析学への「反感と無理解」に基づいた上で、「甚だしき暴言と嘲笑と戯画化」を繰り返してきたことを批判し、「精神分析にとつては、医学の知識は相対的重要さを要求し得べきものであつて、それは民俗学の知識、夢の知識、伝説、神話、文芸学の知識など、並行して必要とせらるゝ知識である」(p.6)と主張する。つまり、大槻にとって重要だったのは、多様な知が対等に近い関係で「交換し、融通する」ことで生じる新たな学問的可能性だったといえよう。

ところが、この多様性には、常にある危うさがつきまとう。もし多様な知が、単に新奇な素材を羅列し、読者の興味を引くための道具として扱われたならば、それはショー・ウィンドウに展示された商品と同じように、その使用価値から遊離したイメージのみが先行するかたちで、人々に消費されることとなる。大正末年には、学術誌の体裁をとっていた『変態心理』は廃刊を余儀なくされ(1926.10)、それと入れ替わるように、エロ・グロ・ナンセンス色の強い評論や雑文を売りとする会員制雑誌『変態・資料』(1926.9創刊)が台頭してゆく。こうした動向からは、少なくとも〈逸脱〉をめぐる知においては、多様な知の交通による真理の追求などではなく、新たな〈商品〉を生み出す装置としての役割が、この時代・社会の多くの人々に求められるようになっていったことがうかがわれる。

『犯罪科学』もまた、こうした新たな動向のなかに位置づけることができよう。この雑誌は、『変態心理』がその強いアカデミズム志向のもと、なんとか押さえ込もうとしてきた、多様な知が生み出す〈いかがわしさ〉を解放し、その魅力を浮かび上がらせることに成功した。その結果、その創刊号は増刷を7回重ねるほどの人気を博し、この時代を象徴する出版物のひとつとなったのである。

こうして『変態心理』を基点と仮定し、『犯罪科学』と『精神分析』を並べてみると、『変態心理』が育もうとしたオルタナティブな知が、様々な雑誌へと拡散し、それぞれのスタイルに合わせたかたちで利用(流用)されてゆく流れがみえてくる。この潮流については、鹿野政直

が提唱した「民間学」の枠組みによって解釈し、再評価することもできよう。これまでほとんど看過されてきた非主流の知に焦点を当て、正当な評価を与えてゆく作業は、言うまでもなく重要な仕事である。だが、本文で挙げたような雑誌群とその中で生成してゆく知の意義を理解しようとするならば、そのような作業と並行しつつ、これら雑誌につきまとう〈いかがわしさ〉についても、看過すべきでない。〈いかがわしさ〉とは、単に掲載された評論の質が悪いがゆえに生じているのではない。その根本には、同時代の知の権力化と、それをとりまく欲望／期待の膨張という問題が横たわっているように思われる。一見、軽薄にもみえる興味先行の言説が、特定の知を前提とするがゆえに、ある種の権力性を帯びて誌上や社会に流通してしまうことの意味を、考えてゆく必要がある。

大正～昭和期の〈いかがわしき〉書物たちは、今回取り上げた諸雑誌をはじめとして、近年続々と復刻がなされ、好事家以外の人々でも比較的容易に手に取ることができるようになってきた。復刻の充実は、これまで断片的に語られてきたこの領域を、ある程度総体的に捉えることを可能とするだろう。今回、本文が試みたのはその素描である。今後さらに踏み込んだ、新たな分析が現れてくることを切に期待したい。

・復刻版書誌

『精神分析〔戦前編〕』 不二出版 全12巻・別冊1冊 2008.6-2009.1 本体揃価格240,000円

『犯罪科学』 不二出版 全21巻・別冊1冊 2007.10-2008.8 本体揃価格378,000円

『変態・資料』 監修：島村輝 ゆまに書房 全5巻 2006.9 本体揃価格110,250円

『変態心理』 不二出版 全34巻・別冊1冊 1998.4-1999-11 本体揃価格303,000円

・参考文献

サトウタツヤ(2008)「雑誌『精神分析』における精神分析の展開」(『精神分析』戦前編 解説・総目次・索引)不二出版)p.21-40

曾根博義(2008)『『精神分析』創刊まで一大槻憲二の前半生』(『精神分析』戦前編 解説・総目次・索引)不二出版)p.5-19

馬場伸彦(2008)「“都市の時代”を駆け抜けた雑誌『犯罪科学』の役割」(『犯罪科学』解説・総目次・索引)不二出版)p.7-37